

高校生のみなさん、事務局そして引率にあたられた先生方、大変お疲れさまでした。実施できるか心配でしたが、見事に開催にこぎつけたみなさまの情熱と努力に心からの敬意と拍手をお送りします。そんなすばらしい大会に審査員の一人としてかかわらせていただいたことは、私にとって大変光栄なことです。あらためまして、本当にありがとうございます。本当なら会場で直接語り掛けたかったのですが、こうして書面でお伝えすることになりました。

会場で出場者のみなさんの発表にふれ、いくつか感じたことを書きたいと思います。

まず、みんな上手だなあと思いました。本当です。たくさん練習しているのですね。脱帽です。真剣に向き合っていて発表している姿に、とても深い感銘を受けました。どなたも質の高い発表をしていましたが、もう少しこうしたらいいのかも、と気づいた点もあります。少し長くなりますが書いてみます。

## ■アナウンス部門

全体的に整った表現をしている人が多いのですが、一方で、ご自分で決めたのか部の伝統なのか、型を作っただけに収まっている人がみられました。「こうでなきゃ」という、いわば“コンテスト読み”になってしまっていないか、どうぞ再点検をなさってください。もちろん、「読む」のではなく「話す・語る」ことをめざすという認識はある程度共有されていると思います。ところが、その「話す・語る」ときに、なぜか同じようなパターンに陥っているように感じることもありました。

その原因の一つは、もしかしたら「調子をとっていること」だったりして。

みなさんのなかに、発表しながら指揮者のように手を振る人、ストップウォッチを振り回す人がけっこういました。これ、たぶんよくないと思います。やめませんか？ 調子をつけて読むとそりゃ楽です。練習で体に叩き込んだ「調子」を、たやすくアウトプットできるでしょう。でも私たちがめざしていたはずの自然な語りはどこへ…。

それに、素朴な疑問なのですが、発表しながら時間をはかることにどれくらい意味があるのでしょうか。途中で「おっ、ここでこのタイム。いいペースだ」とか「いかん、練習より2秒押している。テンポアップせねば」などと思って軌道修正するのでしょうか。私だったらそんな“邪念”が入った瞬間にミスしそうです。そもそも、大会規定サイズの前稿であれば、よほど意図してスピードを変えなければ5秒変わるなどということはないはずです。それに、提出前であればいくらでも自分で前稿の字数を調節できるのがアナウンス部門のやさしさの一つ。本番でストップウォッチを見て心を乱されるより、自然な語りに集中したいと私は思います。

私の考えをもう少し書きますと、人間なのだから語り方なんて人によって違うし、同じ人が語るにしてもふつうは毎回同じにはなりません。もちろん、日本語のきまりとして、発音・アクセントや意味の切れ目など、ある一定のお作法はたしかにあります。でも、ご自分の普段の会話を思い出していただくと、まるで工業製品のようにいつも同じ仕上がり・同じ質感で話すことなんてありませんよね。コンピュータによるカラオケの採点がどんな仕組みなのかはよく知りませんが、放送コンテストは機械が審査するものではありません。要綱に示されたいくつかの視点・条件を満たしつつ、単語の選び方も含めて、あなたという人間から響くあなたらしい自然な語り方で伝えてほしいと思います。練習で固めた「調子」をひたすら完璧にトレースすることに熱心になっているようでは、あなた自身の普段の語りから大きくかけ離れた“偶像”ができあがってしまってもったいないと感じるので

## ■朗読部門

朗読においてめざす境地や味わい方はいろいろあると思います。あなたはどんな朗読が好きですか。私の場合は「場面がリアルに想像できる朗読」を聞いたときに感動でゾクゾクします。そのためにどんな工夫をしたらよいのでしょうか。

例として、私がラジオで朗読に取り組んだ時のことを書きます。ベテランの先輩がつきっきりで指導してくれました。その時かなりエネルギーを注ぐように言われたのは、その場面のあらゆる要素を細か〜くハッキリさせていく作業でした。例えば、登場人物。何歳で、どんな気持ちで、身長はどのくらい、どんな性格で、どんな服を着ていて、どこに立ってどっちを向いているのか。もう一人はそこから何メートルくらいの所において、立っているのか座っているのか。どちらの手に何を持っているのか。そして環境。いま何時で天気や気温はどうか。その部屋はどれくらいの広さで、窓はどこにあって、どんな椅子があって、外にはどれくらいの距離に何が見えるのか…。作品に描かれていない部分は自分で決めていきます。

もちろんこのようなアプローチが絶対とは思いません。でも、この視点をもってみなさんの発表を聞いていると、時々「矛盾」に気づくことがありました。自分の中で登場人物や環境の定義づけがあいまいだと、立ち位置が入れ替わったり、途中で年齢や性格がブレたり、歩いている方向がわからなくなったりするのです。そうすると、その作品の世界を聞き手がうまく想像するのが難しくなり、途中でもういいやとあきらめてしまいたくなります。ブレない的確な描写をする準備として、試してみてください。

同様に、間の取り方や声の高低なども、作品をじっくり読みこんで研究していくとご自分の中での確に見えてくるのではないのでしょうか。力をこめて声を張る場面と、ささやくように表現するところと、決してその二つではなく、その間にさらにたくさんの段階があるはずです。よく研究し計算している方の発表には迷いがなし、あいまいなままに勢いで発表している方はなんだかぼやけているように感じます。その違いは、やっぱり聞いていてわかるものです。

みなさんのなかに声の幅や表現のバリエーションが思うように広がらないと悩んでいる方がいたら、中途半端に探ろうとせず、思い切って振り切った表現に挑戦してみてください。録音して聞いてみるとわかるのですが、自分ではすっごく頑張っただけでトーンを上げたつもりでも、案外まだまだおとなしいってことはよくある話です。練習段階であれこれ思い切って試すと、いい選択肢が見つかるかもしれませんよ。

アナウンスも朗読も、大会は発表の場であると同時に「またとない研究のチャンス」です。

ふだんから同じ学校の仲間に語りを聞いてもらって気づいたことを自由に伝え合うのは当然ですが、大会には各地からたくさんの同志が集まります。なるべくたくさんの人の発表を、どうか注意深く聞いてください。ここがうまいな、こんな工夫をしてるな、私だったらこうするな、など、いろんなことに気づいてください。ほかの人の発表を聞いていろいろ気付ける人は、ご自身の表現の幅が広がるのもきっと早いと思います。うまいな、好きだなと思うところをどんどん参考にして、ご自分の上達につなげてください。

私も高校時代は放送部の活動に打ち込み、とても充実した日々を過ごしました。九州大会などで友達もでき、いまでも交流が続いている人もいます。なにより、ライバルがいたおかげで鍛えられました。現役高校生のみなさんにも、そのような喜びを感じてもらえたらと願っています。

新型コロナでさまざまな機会が失われています。高校スポーツのことはたくさん注目されているけれど、それだけじゃないぞ、放送もがんばっているんだぞと、みなさんどうか胸を張って堂々と活動し、一緒に盛り上げていってください。みなさんのいきいきした発表にまた出会えるのを心待ちにしています。